氏名（本籍）	渡邉美香（ワタナベミカ）（神奈川県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第234号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉静穏を聴く　逍・遊・遙 〈論文〉アグネス・マーチンの絵画における抽象表現と精神性について －生の意識と感性の発達を中心に
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　准教授（美術学部）　木津文哉
（論文第1副査）	〃　〃（〃）　小松佳代子
（作品第1副査）	〃　教授（〃）　本郷寛
（副査）	〃　准教授（〃）　佐藤時啓
（〃）	〃　名誉教授　上野浩道

（論文内容の要旨）

私は、実技制作において写真を用い、光と影による抽象表現を追求している。抽象表現は、感情や感性を他者と共有する方法として、線や形、色による知覚を捉え直す試みである。この試みは、表現が決して即物的なものではなく、意識や心の問題であることを私たちに問いかける。私は、人々が、個人的な違いを越えて「喜び」や「安心」という内面的な充実を共有する可能性を、アメリカ人現代美術作家であるアグネス・マーチン（Agnes MARTIN、1912-2004）の絵画に見出した。そこで、本稿では、彼女の抽象表現に焦点を当て、制作者の立場から、彼女の絵画とその言説を分析し、彼女の抽象表現と精神性の結びつきについて探究した。さらに、生の意識にもとづいたマーチン独自の抽象表現が、感性の発達を促すものであることを明らかにし、抽象表現の可能性を理論的に考察した。

第1章では、日本では充分に研究されてこなかったマーチンの美術活動の全体像を、欧米の先行研究とアメリカでの現地調査をもとに明らかにした。これまで、マーチンについては、日本での研究はほとんどなく、欧米での研究も、展覧会に即した形で作品を紹介するものであり、絵画の形式的な分析から、抽象表現の流れの一過程（ミニマリズム）にマーチンを位置づけるにとどまっている。また、彼女の作品に対する東洋思想からの影響が言及されるが、彼女の抽象表現における自然観や生の意識について、内在的に研究が進められていないといった問題点を指摘した。

第2章では、従来ミニマリズムの一作家と位置づけられてきたマーチンのグリッドの絵画について、その表現方法、制作意図に着目し、ミニマリズムの絵画との決定的な違いを明らかにした。ミニマリズムが構成を考えない非関係的方法を用いたのに対し、マーチンのグリッドは正方形の画面を意識し、画面の中に生じる知覚の変化の質に着目しながら、感情のイメージをもって調和を目指したものである。それゆえ、ミニマリズムに見られる物質としてのキャンバスの形を変えるような表現（シェイプト・キャンバス）は、マーチンの絵画にはあり得ない。また、従来の研究が、出来上がった作品にのみ着目していたのに対して、本稿では、絵画の制作過程とそれに伴う言説にまで踏み込むことによって、彼女のグリッドが「無力さ」や「幸福」といった感情のイメージを表現したという点で、ミニマリズムとは全く違うものであることを明らかにした。

第3章では、マーチンのストライプの絵画とその言説の両面から彼女の絵画観を明らかにした。ストライプの絵画を、手書きの線、繊細な色遣い、淡い色を塗る行為などの制作過程に即して、現地調査も

含め丹念に分析した結果、それらの行為は彼女の安定した心理状態を示すものであることが明らかになった。彼女の作品は、その雰囲気に包まれた鑑賞者の感情の応答を呼び起こし、彼女が表現した喜びの感情を鑑賞者自身の体験として持つことを促すものである。これは、美術作品が、鑑賞者の美の「気づき」を促し、感性を発達させるものであるという彼女の絵画観にもとづいていた。そしてこうした考察を通じて、抽象表現は、作家の心の状態と表現を直接的に結びつけるものであり、鑑賞者と制作者の精神世界をつなぐ真実を探究するものであることが明らかになった。

第４章では、マーチンの美意識の拠り所となる思想、自然観、生の意識を時代状況、東洋思想との関係、さらには同時代に彼女と同じ問題意識を抱いていたエーリッヒ・フロム（Erich FROMM、1900-80）の思想などを手がかりに浮かび上がらせた。物質主義にもとづく所有欲に対して、マーチンは自尊心からの決別によって安らかな心を見出そうとしていた。これは、西洋近代の“もつ（to have)”思想に対して“ある（to be)”思想を対峙させたフロムの問題意識と共通するものである。フロムと同様に、マーチンも当時のアメリカの知識階級に流行していた鈴木大拙の影響を受けてきたと従来言われてきたが、彼女の自然観や精神性をめぐる言説を丁寧に追っていくと、必ずしも禅の影響ではなく、東洋思想を受け入れつつも独自の世界観にもとづくものであることが判明した。彼女の精神世界における真実の探求は、よりよく生きることを目指す生の意識に根ざしていた。この「生」を肯定する精神の働きは、彼女が抱いていた感情のイメージである幸福や喜びと結びつけられる。こうしたことから、マーチンの絵画の永遠のテーマは、生きることそれ自体を喜びとして受け止め、「生」を肯定するこの心の働きを美術制作の中で現出させることにあったことを導き出した。

以上のことから、本稿では、マーチンの芸術が、真実の探求であることを強く願う、極めて意識的な作業であったことを見出した。92歳で生を終えるまで一つのスタイルを貫き、一人で制作を続けた彼女の絵画は、生きることそのものである。その抽象表現は、人の生の意識への呼びかけという根源的なものを求めていた点で、芸術を通して真実を他者と共有することを目指すものであると結論づけた。彼女の抽象表現と精神性の結びつきは、感情にもとづく新たな美の発見や共有、創造への力を生み出す感性の発達と、人が生きていく上での普遍的な価値を見出す美術の可能性を示唆するものであった。